

長迫公園（旧海軍墓地）

帝国海軍墓地は 1890 年に開設された。もともとは海軍の艦船に乗船中に病気で亡くなった水兵の埋葬地として使われていたもので、157 名の水兵が個別のお墓に埋葬されている。日清戦争（1894～1895）や日露戦争（1904～1905）などの大規模な軍事紛争に巻き込まれた日本では、特定の軍艦に捧げられた記念碑や、軍艦に乗船中に亡くなった兵士の名前が刻まれた記念碑が新たに建てられた。

墓地は、第二次世界大戦（1939～1945）中の空襲や、1945 年の枕崎台風（台風アイダ）の被害を受けた。第二次世界大戦終了後、国有地となり、補修工事が開始された。1947 年には長迫公園として一般公開された。改修後は市の維持管理能力が不足していたため、地元の海軍の退役軍人たちが中心となって整備を行った。1971 年には、この有志が「呉海軍墓地保存会」を設立し、現在に至っている。年月を経て、公園内には戦艦「大和」とその乗艦中に殉職した兵士に捧げられた記念碑など、より多くの記念碑が建立された。他の記念碑は、特定の部隊のメンバーに捧げられているか、特定の船や島に奉仕している間、彼らの命をあきらめた船員や兵士の名前を一覧表示している。古い紛争からの記念碑は大きいですが、そのような第二次世界大戦中に殺された兵士を称えるものなどの新しい記念碑は、スペースを節約するために小さく保たれていた。この変化は、第二次世界大戦中の未曾有の生命の損失を示している。

墓地にある墓石の一つは、イギリス人の水兵のものである。1902 年の日英同盟成立後、日本帝国海軍とイギリス海軍は緊密な関係を保っていた。その関係の一環として、1907 年にはイギリスの戦艦が呉を訪れている。呉に向かう途中、ジョージ・ティビンスという 19 歳のイギリス人水兵が海中に転落して溺死した。英国海軍は同年、呉海軍墓地に彼に捧げる墓石を設置した。第二次世界大戦終了後、呉市が連合国からの爆撃に耐えた報復として、一部の市民がティビンスの墓石を破壊した。しかし、大多数の呉市民はこの行為を不当だと感じ、資金を集めて碑を再建し、将来の荒らしから守るために金属製の囲いで囲った。墓は現在まで墓地のボランティア団体によって維持管理されている。また、ティビンスの碑などの墓石には、長迫小学校の生徒たちが定期的に花を飾り、毎年秋分の日には、呉海軍墓地保存会と呉市が合同で戦没者の慰霊祭を行っている。